

平安朝寺院組織の研究

佐々木 令 信

本研究は、平安朝寺院組織の解明という課題にもとづき、各個寺院の管理運営組織を探究し、その比較・検討を通じて、大寺院の内部機構、構成員の身分階層などをあきらかにすることを目的とする。本年度はその一環として、寺院組織において重要な意味を有する法会の調査・研究を行うこととし、その一形態である奈良興福寺における慈恩会を調査した。

慈恩会は、法相宗宗祖である慈恩大師窺基（六三三—六八二）の正忌日（11月13日）に行われる宗祖追孝の法会である。天曆5年（九五二）の始修といわれ、慈恩大師画像を奉懸してその照鑑のもとに論義形式で行われている。

この法会が、平安時代の法相宗・興福寺にとって極めて重要な位

置をしめていたことは、①法門を談ずる論義形式の法会である点
②僧綱に補任される階程である点 ③多額の費用を要する大規模な法会である点 ④宗祖忌である点 等の諸点にわたって指摘することができる。

慈恩会の特性としてはまず第一に、慈恩大師の教学・思想にもとづき、法相宗の根本聖典である『弥勒上生経』・『成唯識論』等、経論釈の奥義を究めることを目的とした論義形式の法会である点が挙げられる。顕教としての立場にたち、かつ自ら「論宗」と称する法相宗・興福寺にとっては、このことは教学の発展上、甚だ重要な意味を持つこととしなくてはならない。

また、この時期、南都仏教において僧綱に補任されるに際しては、

興福寺維摩会・薬師寺最勝会・宮中御齋会の南京三会において順次講師の役を勤仕しなくてはならない習いであった。そのような状況下で、興福寺においては維摩会講師勤仕に先立ち、まずこの慈恩会に勤仕することが必須の要件とされていたのである。慈恩会において行われる論義は、単に法門を談ずる修学のためのみならず、論匠が僧綱に補任されてゆく階程の一としての意味もあわせ持つものであったことがしられる。

一方、当時の諸史料を参酌すると、この慈恩会が平安期を通じて法相宗一宗の大会たるにふさわしい内容を整えていったことがうかがわれる。したがってその勤修に際しては、寺院組織を通じ、寺領等から多額の費用が集約されていたことが推察される。すなわち、慈恩会は平安期興福寺の寺院運営上からも閑却しえない意味を有する法会であったといえることができるのである。

また、平安期は、古代において既に成立していた大寺院が、各々の宗祖の教学・思想を基軸に、次第にその内部機構を諸般にわたって改変してゆく時期にあたる。かかる時期に宗祖追孝の法会である慈恩会が始修され整備されてゆく営みは、そのまま興福寺が自らの寺院組織を変革してゆく歩みを示すものともいい得るのであろう。

以上、諸点にわたって指摘したように、慈恩会は平安期興福寺において極めて重要な法会とみなされ得るものであった。そのことは

院政期の宮廷貴族である藤原宗忠の日乗『中右記』大治四年（一一二九）十一月十三日の条に、「今夕御寺慈恩会也、（中略）、止了云々、（中略）慈恩会已一日不行云々、及数百歳法会絶了、悲歎無極」とあり、「法相滅亡之時歎、可哀可歎」（同前日条²）とあることからもしられることである。

かかる法会である慈恩会を検討してゆくことは、興福寺のみならず平安朝寺院の組織形態を究明する上で有効な手段と考えられる。その推移を文献史料によって明らかにしてゆく作業も継続して行すべき課題であることはいままでもないが、本研究では、現在においても継続して勤修されている催会形態を精査することを通じて、その立体的把握に主眼を置くことにした。

現在、慈恩会は、興福寺・薬師寺の法相宗二大本山を会場にして年ごとに交互に行い、両寺出仕僧によって厳修されている。

以下においては、一九八九年十一月十三日に興福寺仮金堂を会場として執行された慈恩会について、次第に沿ってその内容を略記することにしたい。

現行の慈恩会は、以下の次第によって行われている。（活弧内は開始時刻を示す）

一、入道場

（19時33分）

- 一、総礼 (19時35分)
- 一、講・読師登高座、大衆着床 (19時36分)
- 一、唄 (19時37分)
- 一、散華 (19時40分)
- 一、梵音 (19時53分)
- 一、錫杖 (20時07分)
- 一、表白 (20時29分)
- 一、神分 (20時35分)
- 一、勸請(探題入堂) (20時38分)
- 一、経釈 (20時40分)
- 一、論釈 (20時42分)
- 一、講問論義 (20時46分)
- 一、講下鐘三鳴、講・読師下高座 (21時01分)
- 一、読経、行香 (21時02分)
- 一、番句 (21時10分)
- 一、番論義 (21時14分)
- 一、総礼 (21時36分)
- 一、退道場 (21時37分)

なお、これらの会場において行われる次第に先だち、同寺本坊内

において、次の三種の儀式がとり行われたので、はじめにこれらについて説明を加えておきたい。(以下 図1参照)

- 一、夢見の事 (17時50分)
- 一、奉唱の事 (18時52分)
- 一、会始・註記入道場 (19時11分)

〈夢見の事〉

まず夢見の事は、本坊内に設けられた探題房において行われるもので、探題(法会主催者)が、論匠(論義参加者)に当日の論題を事前に知らしめる儀式である。

古来、講問論義・番論義および堅義等の論題は、春日権現(法相宗の擁護神)より示されるものとされており、故に探題房には、あらかじめ春日社惣の御神影である春日赤童子像を奉懸し梅枝(いわゆる「依り代」としての性格を持つ)を立てておく。

探題(衣体素絹五条)は、定刻に註記(素絹五条)を伴って②の位置より房内に入り影前に着座、春日明神の影向を請うべく祈念を始める。続いて、定中において当日の論題を感得した探題は、これを短冊に認める。註記はこれを確認し、房外に侍している論匠(当日は番論義者四名と講問論者一名の計五名)に合図する(17時53分)。論匠はこれを受けて、番論義第一双の論匠から順次探題房入口に進

み、まず御簾前①で五体投地の所作にて三礼、御簾を巻き上げ膝行で入室し、影前にて再び三礼して探題の前に進む。探題は註記が探題箱から取り出した短冊を受け、左袖下から論匠に示す。論匠は、同じく左袖下から右手を出してこれを受ける。論題を受けた論匠は、入室の時と同様の所作を行い、退出する（17時55分）。以上の所作を繰り返して、最後の論匠退出の後、探題・註記は②の位置より退出（18時14分）。探題は控えの間に赴き、註記は次の儀式の準備に移る。
 〈奉唱の事〉

次に奉唱の事が集会所において行われる。これは講師を始めとする式衆（配役に定められた僧侶）がこれを承り、かつ探題が承認する儀式である。

大衆（式衆を含む全出仕僧）は、開始前までに集会所に参集し、衣体（法服七条）を被着、各々所定の位置に着座する。註記（法服七条）は奉書「A」（配役名を認めた杉原紙・資料1）をあらかじめ自席の文机の上に広げておく。

定刻にいたると、註記は③の位置に平伏し、慈恩会執行の挨拶（諸注意を含む）を行う（18時53分）。引き続き註記は、「A」を講師以下式衆に順次持ち回って奉唱を促し、式衆は各々自名の下に「奉」字を加署する。終了後、註記は一たん自席に戻り、「A」を包紙に包んで懐中し、代わって奉書「B」（論匠名を認めた杉原紙・資料2）

を文机に広げ、同様に持ち回り論匠に加署を促す（19時04分）。「A」「B」ともに加署が終わると、註記は④の経路をへて探題の控えの間に赴き、これを探題に提示する。探題はこれを承認し、花押を捺する（19時06分）。捺押終了の後、註記はこれを持って集会所の自席に戻る（19時10分）。

〈会始・註記入道場の事〉

引き続き会始・註記入道場の事が行われる。これは、会始（法会開始者）が、堂内の荘嚴等を法会開始にふさわしいものとして確認し、大衆の入道場を促す儀式である。

奉唱の事終了後、註記は会始に入道場を促し共に退出、会場である仮金堂に向かう（19時11分）。会始は、小綱（法会雑役掛）等によってあらかじめ荘嚴された会場に不行き届きのないことを確認し、註記に講師（表白および講問論義勤仕者）・読師（経論読誦者）・精義（論義判定者）および他の大衆の入道場の案内を請う。

これと並行して集会所においては、侍（法会雑務者）によって入道場の案内が行われる。案内は講師・読師・精義とその他の出仕僧とに分けて、各々三度まで行われる。

定刻にいたると侍は集会所に参上し、⑤の位置に平伏、まず「大衆、初度の案内」と発声、講師・読師・精義を除く大衆はこれに「奉（ホウ）」と応じる（19時12分）。二度目の案内は、同様にして「大

衆、二度、精義・講・読、初度の案内」と発声され、今度は講師・読師・精義を含む大衆がこれに「奉」と応じる（19時15分）。さらに三度目の案内が「大衆三度、精義・講・読、二度の案内」となされると、大衆は同じく「奉」と応じ、はじめて立座する（19時22分）。その後、集会所を出て本坊前庭に下藪前にて整列（図Ⅱ 参照）の後、所定の経路（図Ⅲ参照）をへて会場である仮金堂へ向かう（19時27分）⁴。

以上が会場における法要に先立って行われる三種の儀式の概要である。

以下は、先に記した次第にしたがって法要が執行されるが、それについて記す前に、会場について若干の説明をしておくことにする。（以下図Ⅳ参照）

会場は既述のとおり興福寺仮金堂であり、堂内には本尊たる釈迦如来坐像をはじめ、脇侍である薬王・薬上両菩薩立像、および四天王立像が安置されているが、当日は慈恩会の本尊として慈恩大師画像が釈迦如来坐像の前面に奉懸される⁵。堂内には、慈恩大師の照鑑を仰ぐかたちで、講師読師の登下する高座と、大衆の坐する床とが設けられ、他に散華に用いる華籠、講師の用いる紙燭・表白、論匠の用いる菊の枝、註記の用いる磐などが所定の位置に置かれる。ま

た、会場正面石段下には、幔幕が張られ、両脇には篝火がたかれる。会場の荘厳は特に通常の荘厳と異なるものではないが、画像正面の華瓶・六器等には生花が生けられ、供物が捧げられる⁶。

〈入道場〉

法要次第は入道場から始まる。本坊前庭を出発した大衆は、下藪前にて順次会場前に参着するが、これらのうち、まず講師読師をのぞく諸僧が、図Ⅳ①の経路をへて後戸より順次入道場し（ただし②の位置で草鞋に履き替える）、各々の床前に起立する（19時33分）。註記はこれを確認すると、脇に控えている侍に向かって「侍々、講・読、三度の案内」と講師読師への案内を促す。侍は「奉」と受け、石段下幔幕前に待機している講師読師に向かって「講・読、三度の案内」と告げる（19時34分）。すなわち、講師読師に対する三度目の案内は、会場の荘厳が完全に整った後になされるのである。講師読師はこれを受けて、③の経路で会場正面より入道場（19時35分）、本尊前④の位置に起立する。

〈総礼〉

註記、「総礼々々」と発声し、磬二打。大衆はこれを受けて、起立したまま合掌礼拝する（19時36分）。

〈三礼〉

引き続き、註記、磬三打。大衆は磬に合わせて三礼を成ずる。これは立礼灯明礼拝（合掌しつつまず腰を落としてのち頭を下げる）によって行われる。三礼終了の後、講師読師は⑤の経路で登高座し、精義以下大衆は床前に草鞋を脱いで着床する。

〈唄〉

以下、錫杖までの次第は四箇法要と称され、古来多くの法会に際して用いられ、また現行の法会にも広く見ることのできるものである。論義に先立ち、仏法僧の三宝を讃嘆し供養する意味を持つ。

唄師は、着床と同時に右膝を立てて半跏に坐し、膝前に檜扇を立てつつ唄（如来唄・資料3）を唱え始める（19時37分⁷）。唄が始まると、小綱（衣体Ⅱ素絹五条）は「A」「B」の諸僧に華籠を配る⁸。これをうけて散華師五名「A」は、本尊前④の位置に並立し、「B」の諸僧は華籠を持って床前に起立する。

〈散華〉

本尊たる慈恩大師御影に散華供養を行い、会場を荘厳する。

散華は、通常、全体が上・中・下三段に分かれ、このうち中段には釈迦・葉師・弥勒・観音等の文がある。本尊や法要の内容等によって、これから適宜一文をえらび用いるが、慈恩会においては、慈恩大師が弥勒上生経を感得して以後、兜率上生を願求したことにちなみ、弥勒上生経を講ずるのであるから、散華にも弥勒の文

を用いるのである。（資料4）

唄師の如来唄のうち、声明譜によって唱えられる部分（注7参照）が終わると、散華頭（散華師「A」のうち）は、散華上段の発音を始める（19時40分）。大衆はこれに続いて同音し、上段が終わるとともに散華する。続いて散華頭、中段を発音（19時43分）、大衆同音しつつ行道（一匝）に移る。すなわち⑥の位置より後堂へ回り、中段が終わるとともに散華する。下段は後堂で発音され（19時48分）、大衆同音しつつ⑦の位置より正面に戻る。散華師は④の位置へ再び並立、「B」の諸僧は各々の床前に戻り、下段が終わるとともに散華する。

〈梵音〉

散華が終わると、梵音頭（散華師「A」のうち）発音し（19時53分、20時00分）、大衆同音しつつ散華する（19時57分、20時04分）。

（資料5）

〈錫杖〉

梵音終わって、小綱、錫杖を持って④の位置に進み、錫杖頭（散華師「A」のうち）に渡す。錫杖頭はこれを受け発音（20時07分）。大衆同音し、「示如実道 供養三宝」（二度目）で錫杖三振。錫杖頭発音し（20時12分）、大衆同音、「願清浄心 供養三宝」で三振。錫杖頭発音し（20時15分）、大衆同音、「故我稽首 執持錫杖 供養三

宝」(二度目)で三振。錫杖頭発音し(20時21分)、大衆同音。以上のごとく次第して、錫杖終了後、散華師・大衆着床し、小綱は華籠を撤する(20時26分)。(資料6)

以上をもって四箇法要と称される部分が終了する。

〈表白〉

続いて慈恩会催行の主旨を述べる表白に移る。

註記は華籠が撤されたのを確認し、小綱に向かって「行事の小綱、紙燭をさして高座の辺により侍れ」と告げる(20時27分)。小綱は「奉」と応じて、註記の座脇の燭台を講師の高座に持参する。これを確認して、註記、磬二打。講師は、磬の音を合図にして表白を唱え始める(20時29分)。(資料7)

〈神分・勸請・探題入堂〉

続いて神分(20時35分)・勸請(20時38分)が唱えられる。(資料8・9)これは仏・菩薩・諸天諸神・法相宗擁護の春日明神の会場への影向を請願するものである。

講師が表白・神分を読み終わり、勸請文を唱え始めると、註記、侍に向かって「侍々、探題のお迎えに行き侍れ」と告げる。侍、「奉」と受け、探題の入堂を請いに赴く。探題は、案内を受けた後、梅枝・探題箱を伴って(図V参照)会場正面に着到し、⑧の経路をへて影向の戸より入道場、本尊前④で拝礼、着床する。精義は探題の着床

を見て「影向の戸」と発声、これを受けて註記は「侍々、影向の戸を立て侍れ」と発声する。侍は「奉」と応じ、影向の戸を閉じる。⁹⁾

〈経釈・論釈〉

先述のごとく慈恩大師が感得・信仰し、かつ法相唯識の淵源する弥勒菩薩の教説たる『弥勒上生経』(具さには『仏説観弥勒上生兜率天経』と、同じく慈恩大師が女装三蔵らとともに合糝し訳出した、法相宗の根本聖典たる『成唯識論』を講ずるものである。

講師は、勸請に続いて経題を唱え経釈を(20時40分)、論題を唱え論釈を(20時42分)それぞれ行う。(資料10・11)

この後、読師により経題があげられ、講師による祈願がある(20時45分)。(資料12・13)

〈講問・論義〉

講師による経・論釈に対して行われる論義である。問者(会問)が難じ(20時46分、20時49分)、講師がそれに解答する。¹⁰⁾(資料14)

〈講下鐘、講・読師下高座〉

論義が終わると、註記、侍に「講下々々」と指示、侍は後堂に向かつて「講下々々」と告げる(21時00分)。これを受けて、経・論釈および論義の終了を告げる講下鐘が三打される。この後、講師読師下高座して、⑨の位置の床几(仮の座)に坐す(21時01分)。

〈読経・行香〉

続いて般若心経・唯識三十頌が読誦される。(資料15・16)

註記、講師読師の下高座を確認して、「同音心経、三十頌」と発声、これを受けて精義(経頭を兼ねる)が、「般若波羅蜜多心経」と発音、大衆同音する(21時02分)。

読経中に行香が行われる。小綱が探題以下に順次香爐を持ち回り、終了後、本尊前に捧げる。

般若心経が終わると磬一打あって、精義、「唯識三十頌」と発音し、大衆同音する(21時05分)。

〈番の句〉

番論義に先だち、その主旨を表白し、論匠を呼び出すものである。

唯識三十頌の読誦が終わると、番役(番句)、番の句を発音する(21時10分)。(資料17) 番の句を唱え終わって、番役、「〇〇法師答、〇〇法師問」と論匠を召す。

〈番論義〉

先の講問論義と異なり、主として若年のほぼ同等の力量を持った論匠によって行われる論義である。法会の最後に行われるいわゆる法楽論義であり、論匠を稚児もしくは若年者が勤めることから稚児論義とも称される。

二人一組で行われる論義を一双と称し、通例二双から三双が行われる⁽¹⁾。

番役が論匠を召すと、論匠(第一双)は、須弥壇両脇⑥・⑦より徒足にて走り出で、正面で交差、④の位置の円座に着座し、論義が開始される(21時15分)。

第一双の論義が終了すると、論匠は開始時と同様に、正面で交差し後堂へ退出、番役は論匠(第二双)を召す。同様にして④の位置に着座(21時25分)。(双数に応じてこの所作がくり返される)

論義が終了すると、註記、小綱に向かって「行事の小綱、花まいらせ」と指示し、小綱「奉」と応じて、註記の座脇の菊ノ枝を取って答者に渡す。答者はこれを受けて、影前に供花する(21時35分)。

〈総礼〉

註記、論匠が復座したのを確認して、「総礼々々」と発声し、磬二打。講師読師は⑨より正面④の位置に出て並立し、他の大衆は各々床前に起立。註記、磬三打、大衆はこれに合わせて総礼(立礼灯明礼拝)する。註記、磬二打し、総礼の終了を告げる(21時36分)。

〈退道場〉

総礼終わって、探題・講師・読師・精義以下、上臈前にて順次正面より退出、入道場の時と同じ経路で本坊内集会所へ戻る(21時37分)。

注

1 『諸寺縁起集』(菅家本)「興福寺別当坊勤行事」(『校刊美術史料』寺院篇上巻(一九七二・三、中央公論美術出版))

2 『史料大成』本 第六巻

3 一九八九年の慈恵会における人員構成は下記の如くであった。

講師	興福寺住職	多川 俊映
読師	山田 法胤	
精義	多川 兼寛	
問者	藤井 寛田	
会始	加藤 朝胤	
唄師	松久保秀胤	
散華頭	渋谷 光憲	
梵音頭	生駒 基達	
錫杖頭	大谷 徹装	
番ノ句	安田 映胤	
註記	森谷 英俊	
探題	薬師寺住職 高田 好胤	

番論義

(第一双)

山田裕照答

渋谷光憲問

(第二双)

竹中純瑜答

松久保加秀問

その他に、これに随伴する小綱・侍などの諸役がある。

4 通常は、図Ⅲ……線①の経路を用いるが、当日は雨天のため便宜上……線②の経路を用いた。

5 現在、興福寺において奉懸されている画像は、一乘院伝来の「慈恵大師立像」(重要文化財)を粉本として、昭和二十七年(一九五二)に新たに調製されたものである。画像上部の画賛は、当時興福寺別当(第二四三代)であった大西良慶師の揮毫にかかる。

6 慈恵会独特の供物としては、盛り固めた仏飯に、縄状に撚った葦を巻きつけたものが影前に供えられる。

7 如来唄のうち、声明譜の付されているのは、「如来妙色身世」までであるが、それ以下の部分(資料③)に括弧で示した部分についても、省略(半偈)することなく微音にて必ず誦することとされている。

8 散華には小菊等の生花が用いられる。

9 「影向の戸」とは、すなわち春日明神と同体である探題の入堂の戸であることを示す呼称である。

10 この時の論題は「上生経・唯識比量」であったが、論題は、『成唯識論同学鈔』(一一九四―一二四頃成立)、『成唯識論』に関する問答の集成であり、わが国における法相宗学解の第一要書とされる。大日本仏教全書所収)から適宜選定されることとされている。(本問答は、同書第七巻第三よりの調整)

また、通例では、問者による問答の後に、精義が重ねて講師に問う精義重難と呼ばれる一段があるが、この時は略されている。

11 番論義も、講問論義と同様、論題が『唯識論同学鈔』から選定され、問答が調整される。(例えばこの時は、第一双では「便証得転依」と「龍猛皆空」を論題として問答が行われたが、これらはいずれも昭和六十年に、同学抄所収の問答に基づき、多川俊映師によって新たに調整がなされたものである。同書第十巻第二・第一巻第一参照)

なお、第二双の「許依五地」は、番論義重乃跡と称し、「今一度申せ」「何度云テ聞セウズルゾ」の如く、答者が問者の質問を何度も聞き直しつつ進められる。慈恵会の厳格な論義会としての面目をよく示すものといえる一段である。

また、これは別種の論義として、堅義の制が加えられる場合がある。これは、現在、法相宗において最も重要な修行とされており、慈恵会における堅義を中心に、前加行・毎日講・堂参・大廻り・後

夜邊堂等をとまなうものである。豎義を得請した僧（豎者）は、別に設けられた加行部屋において、三七日間（三週間）厳格な作法のもとに種々の伝授をうけ、当日の豎義にのぞむ。慈恩会当日は、講問論義終了の後に豎者が登高座し、引声・切声などを交えた独特な形態で論義が行われる。豎義は得請のあった場合にのみ行われるものであり、平成三年（一九九一）の慈恩会には催行が予定されている。

主要参考文献

慈恩大師御影聚英刊行会編『慈恩大師御影聚英』（一九八二・十一、法蔵館）

横道萬里雄・片岡義道・佐藤道子・岩田宗一・蒲生郷昭編『声明大系 一 南都』解説（一九八四・十一、法蔵館）

横道萬里雄・片岡義道監修『声明大系特別付録 声明辞典』（一九八四・十一、法蔵館）

高田好胤・山田法胤著『薬師寺』（一九八〇・二、学生社）

多川俊映著『奈良興福寺 あゆみ・おしえ・ほとけ』（一九九〇・五、小学館）

付記

この研究については、興福寺住職多川俊映師、同執事森谷英俊師に、種々のご配慮をいただいた。殊に多川師には、貴重なご教示や資料の提供をたまわった。心よりお礼を申し上げる次第である。なお、大谷大学大学院博士課程の杉本理、東館紹見両君の参加をえた。

資料集

※ここには、現行の慈恩会の声明に依用されている聖典その他の原文を載せる。印刷の関係上、声明譜は付さなかった。

資料1・奉書「A」（配役名を認めた杉原紙）

奉唱當年慈恩會請定之事	講師	俊映
	講師	法胤
	精義	乗覺
	問者	覺田
	會始	朝胤
	唄	秀胤
	散華	光憲
	梵音	基達
	錫杖	徹奘
	番句	暎胤
平成元年十一月十三日		註記英俊
探題大僧正		

資料2…奉書〔B〕（論匠名を認めた杉原紙）

奉唱當年慈恩會番論義請定之事

第一双

法師 裕照 答

法師 光憲 問

第二双

法師 純瑜 答

法師 伽秀 問

平成元年十一月十三日 註記英俊

探題大僧正

資料3…唄（如来唄）

如来妙色身 世（間無與等）

（無比不思議） （是故今敬禮）

真宗総合研究所紀要 第八号

（如来色無盡）

（智慧亦復然）

（一切法常住）

（是故我歸依）

※如来唄から錫杖に至る声明は、現在、法相宗勸学院蔵版の『法相宗三時課誦』（明治三十七年十一月五日刊、折本装）所載のものが用いられている。

資料4…散華

（上段）

願我在道場 同音

香花供養佛

（中段…弥勒）

彌勒上生都史天 同音

四十九重摩尼殿

晝夜恒説不退行

種種方便度衆生

香華供養佛

（下段）

願以此功德同音

普及於一切

我等與衆生

皆共成佛道

香花供養佛

資料5・梵音

十方所有勝妙華

同音
普散十方諸國土

是以供養釋迦尊

是以供養諸如來

出生無量寶蓮花

同音
其花色相皆殊妙

是以供養大乘經

是以供養諸菩薩

資料6・錫杖

手執錫杖 當願衆生

同音
設大施會

示如實道 供養三寶

設大施會

示如實道 供養三寶

同音
以清淨心

供養三寶

發清淨心

三世諸佛同音 執持錫杖 皆成佛

故我稽首 執持錫杖 供養三寶

故我稽首 執持錫杖 供養三寶

南無恭敬供養 三尊界會

哀愍攝受 護持大衆

資料7・表白

慈恩會表白

敬白テ法報應化三身如來有空中

道三時聖教三祇四依菩提薩埵

四向四果賢聖衆佛ハ總ハ十方刹土

三寶境界ニ而言ク

方ニ今

於テ瞻部州日本國興福蘭若ニ闍ニ

宗ノ諸德抽デ一心之誠ニ排ニ報恩之樞ニ凝ニ

三業ノ白善ニ展ニ決澤之筵ニ御座

其ノ志趣何者ハ

夫今日者高祖大師息化于瞻部

地遷神于知足天之光息也伏惟

慈恩大師蔚遲氏 諱大乘基長安人

族貴五陵光三輔

智勇冠世超衛霍

文皇崇師稱大聖

羯羅藍位多正夢

金人持神珠寶杵

身相圓滿載誕育

眼浮紫電夏天影

少少之時早拔萃

依止三藏學性相

七十達者四賢聖

亞聖具體比顏子

三性五重唯識義

百部疏主五明祖

字字句句不空置

伯牙響琴徒秘曲

論鼓一振疑關破

對龍象衆能降伏

諱大乘基長安人

鄂公敬德是其親

李唐之初大功臣

生立碑文垂絲綸

漢月入河口方娠

託于胎中吉兆頻

彤雲成蓋覆菓屑

面駐素娥秋夜輪

韶齒之間含慈惇

三千徒裏絕等倫

就中大師深入神

窮源盡性同大鈞

博涉學海到要津

著述以來誰得均

皆有證據永因循

下和泣玉獨霑巾

他宗望風自委塵

昇師子座擅嘖伸

每日月必造慈氏像

每日常誦菩薩戒

一時高樓秋燈下

大光普昭觀自在

不圖漢土化等覺

自書般若何所至

瑞光赫々慶雲起

遊博陵原製玄贊

當寶塔品人有夢

二十八字一挑句

傳導大師以此偈

不嫌暗漏作章疏

咫尺龍顏奉鳳詔

天不與善化緣盡

永淳二年十一月

先師墓側行耐禮

本願不圖奉彌勒

名垂萬古涉五竺

依之迎圓寂之御忌

增進覺路資貯

一生偏慕兜率身

唯杖木叉制波旬

有人窺見偷逡巡

金手染翰顯其真

開甘露門利兆民

清涼山曉五臺春

文殊正現示宿因

法華曠旨傳遍賓

諸佛證明遍照隣

文章微婉枉獲麟

千佛滅度讚大仁

齒牙煥炳光曜新

出宮入金殿陪紫震

歲五十三俄亡泯

仲旬三日為忌辰

風悲雲愁慘松筠

生第四天一步華因

玄蹤雖多盡難陳

依之迎圓寂之御忌

增進覺路資貯

双之英才^ヲ以^テ爲^ニ令法久住^ノ謀^ト矣^ト然則^レ三寶^チ

知見垂^レ證明^ヲ於感應^ノ水^ニ高祖大師添^ニ光^ト

輝^ヲ於法性^ノ月^ニ重^テ祈^ル伽藍安穩^ニ而宗風

愈^ア爾^キ國家靜謐^ニ而德化倍^マ明^ク二明^ノ之

窓^ノ月千秋無^レ傾^ク九春之華^ノ菊萬歲^ニ長^ク薰^{ラン}

※ 表白は、当年の講師勤仕者が適宜調整するものとされており、

現行のもの以外にも数種が伝来している。

現在、興福寺において用いられているものは、明治四年の慈

恩会に際し、当年の講師を勤めた大西良慶師によって筆写された

表白であり、大江匡房（一〇四一—一一一）の「大唐大慈恩寺

大師画讚」（『本朝統文粹』巻第一一所収↓『慈恩大師御影聚英』

「伝記文集」および『新訂増補国史大系』第二九巻下参照）をも

とにつくられている。昭和二十七年の慈恩大師画像新調に当たり、

多川乗俊師によって転写され、その際、以下の神分・勸請・経論

釈・経題・祈願と合して卷子に表装された。外題が「慈恩会表白」

と付され、「昭和二十七年十一月十三日 慈恩大師御画像新調爲

記念頓寫畢 當年講師 乗俊」の奥書を持つ。

なお、（一）内は堅義が行われるときのみ読誦される。

資料8…神分

大乘講讚之庭中宗論談之砌^{ナレハ}爲^テ食^コ

受^シ法味^ヲ證^シ明^{セン}善根^ヲ冥衆^ヲ定^テ來臨影^向

然則^ニ上^ニ奉^テ始^ニ大梵天王^ニ三界所有天王天

衆日月五星諸宿曜等^下堅牢地神^ヲ

魔王界五道大神冥官冥類惣^{テハ}日本國

主天照太神賀茂下上八幡三所王城守護諸

大明神殊^{ニハ}法相擁護春日權現別^{シテハ}當寺鎮守

春日明神乃至八十餘州^ノ大小^ノ神祇冥道併^テ奉^爲

法藥莊嚴威光倍增^ノ物神分^ニ

般若心經 金一丁 般若經名

奉爲高祖大師御増進佛道 阿彌陀佛名 金一丁

奉爲三國傳燈諸大師倍増法藥 梅怛麗耶佛名 金一丁

奉爲金輪聖主玉體安穩 藥師佛名 金一丁

奉爲皇后陛下皇太子諸王殿下御願圓滿 觀自在菩薩名 金一丁

爲伽藍安穩興隆佛法 釋迦牟尼佛名 金一丁

爲長官大和尚位并諸德大衆善願成就 釋迦牟尼佛名 金一丁

爲寺社繁昌廣作佛事風雨順時五穀豐饒 四大天王名 金一丁

爲講筵不退修學増進 護法等菩薩名 金一丁

爲乃至法界平等利益 妙法經名 金一丁 唯識妙典 金一丁

資料9・勸請

至心勸請釋迦尊	當來導師慈氏尊
彌勒三經深妙典	八萬十二諸聖教
普賢文殊諸菩薩	護法戒賢諸論師
梵釋四王諸護法	還念本誓來影向
證知證誠講演事	至心懺悔無始來
自他三業无量罪	今對三寶十力前
皆悉發露盡懺悔	歸依佛法僧福田
受持菩薩三聚戒	斷惡修善利群生
生々世々無闕犯	願我生々見諸佛
世々恒聞深妙典	恒修不退菩薩行
悉證无上大菩提	

資料10・經釈

佛說觀彌勒菩薩上生都率天經
 將^ニ釋^ス此^ノ經^ヲ以^テ三^ノ大意^ヲ釋^ス名^ヲ入^レ文^ヲ判^シ釋^ス三^ノ門^ヲ可^シ釋^ス初^ニ來^ニ意^{トイフハ}

真宗総合研究所紀要 第八号

者灑^{ソク}群萌^{ボウニ}之一^ニ雨濟^{スクウ}衆獸^ヲ之通津斷^シ上^ニ首^ノ疑^ヲ
 網^ニ談^ス勝^ス天^ノ之^ニ法^ヲ利^キ開^キ法^ノ生^ノ之^ニ妙^ヲ因^ニ叙^ス彌^レ勒^ノ上^ニ天^ノ
 大意如^レ是^ニ次^ニ釋^ス題^目者^佛者^三覺^圓滿^義
 說^ト者^四辯^八音^功用^觀者^欣趣^彌勒^者唐^ニ
 云^フ慈^氏一^ニ菩^薩者^祈覺^運生^ノ名^也上^生者^往
 昇^兜率^天者^所居^名故^云佛^說觀^彌勒^菩薩^上生^兜率^天經^後入^文判^釋者^初從^ニ
 如^レ是^我聞^下至^合掌^住立^佛前^者說^經因^起
 分^也次^從爾^時優^婆離^至若^他觀^者名^爲邪^觀
 觀^一者^發請^廣說^分後^從爾^時尊^者阿^難
 下^至禮^佛而^退聞^名喜^行分^也廣^說述^是
 當^來導^師補^處慈^尊上^生兜^率儀^式
 是^此經^大概^也

資料11・論釈

成唯識論卷第一 將^ニ釋^ス此^ノ論^ヲ可^レ有^三
 門^ニ來^意慈^氏菩^薩趣^阿僧^請說^{十七}地^論
 天^親菩^薩依^瑜伽^文製^三十^行頌^{十大}論^師賞^二
 頌^文各^造義^釋遍^學三^藏傳^梵本^糝爲^二

部二題目者成唯識論者一部都名也成者能
 成稱唯識者所成名唯謂苜別遮无二外境一識
 謂能了證有内心論者性相決判義卷第一
 者次數也後入文判釋一宗前敬敘分自初歸敬頌
 二依教廣成分自云何世間三釋結施願分此論三
 分以下文也凡今論者一代三時之肝要也含正
 教正理之幽致五分十支之秘蹟也究唯識
 唯心之妙理情思其五天嚮望之寄
 可類彼一劫烏曇藥者歟

抑返經論有多文其初文如何

資料12…経題

南無佛説觀彌勒菩薩上生兜率天經
 南無成唯識論卷第一

資料13…祈願

影向神祇増威光

護持佛子成善願

資料14…講問論義

問 講讚經中付明説教利生相且上生經
 可云大乘經耶
 論中遍學三藏對小乘外道爲成唯識
 義立量云眞故極成色不離於眼
 識自許初三攝眼所不攝故猶如眼
 識云云

可云正比量耶

答 論中對小乘外道爲成

唯識義立量云眞故極成色

不離於眼識自許初三攝眼所

不攝故猶如眼識云云可云正比

量耶 講讚經中付明説經利生

相且上生經可云大乘經耶

此事可云大乘經也 扱彼是正比量

可答申也

問 是正比量也 扱彼是大乘經云

御答ニ付有レ疑

經文又阿逸多具凡夫身未斷諸漏云云

此文小乘經見タリ御答有レ疑

扱彼ハ是モ御答ニ付有レ疑大乘宗以テ即識ニ

爲シ勝義ト小乘意以テ離識爲シ勝義

即離之義差互立敵勝義不ニ極成ニ故

有法色既不ニ共許豈無ニ所別不成ノ失耶

彼清辨所立眞性有爲空比量立敵

眞性不ニ共許故定有ニ此失三藏今量

豈不レ然耶御答旁々有レ疑

答ニ是モ答申付御難來大乘宗以即

識爲勝義小乘意以テ離識

爲勝義即離之義差互立敵勝

義不極成故有法色既不ニ共許

豈無所別不成失耶彼清辨所

立眞性有爲空比量立敵眞性

不共許故定有此失三藏今量

豈不レ然耶答申旨不レ可レ然

扱彼ハ是モ答申付御難來經文又

阿逸多具凡夫身未斷諸漏云云

真宗総合研究所紀要 第八号

此文小乘經也見タリト答申旨不レ可レ
爾如何可ニ成申一

此事正見ニ經文初列ニ跋陀婆羅文殊等

菩薩衆至下五百億天子阿耨多羅三藐

三菩提不レ退所レ說大乘經也云事但於ニ

具凡夫身優婆利難優婆利者身

處小位未レ知大乘化儀致ニ此難者歟

不レ可有ニ相違扱彼レ此事凡護法意

立ニ四重勝義ニ科諸法名ニ世間勝義

四諦因果爲ニ道理勝義ニ雖ニ小乘宗不レ

許ニ四重勝義ニ彼宗勝義當ニ初二重

是レ極成勝義也既有ニ共許勝義故

以レ此爲ニ簡別ニ故無ニ此失不レ同ニ護法

清辨眞性差互無共許分有爲空義

大異尤犯ニ不成失

相違有不可過ナシト答申ス可也

※多川俊映師手沢本

資料15…読経(一)

般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊等皆空度一切苦厄舍利子色不異空空
不異色色即是空空即是色受想行識等亦
復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢
不淨不增不減是故空中无色无受想行識
無眼耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界
乃至無意識界无無明亦無無明盡乃至無
老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得
以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故
心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛
倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜
多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波
羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無
等等呪能除一切苦真實不虛故說般若波
羅蜜多呪即說呪曰 揭諦揭諦 波羅揭諦
波羅僧揭諦 菩提薩婆呵 般若心經

金一丁

資料16・誦經(二)

唯識三十頌

世親菩薩造

稽首唯識性 滿分清淨者 我今釋彼說
利樂諸有情 由假設我法 有種種相轉
彼依識所變 此能變唯三 謂異熟思量
及了別境識 初阿賴耶識 異熟一切種
不可知執受 處了常與觸 作意受想思
相應唯捨受 是無覆無記 觸等亦如是
恒轉如暴流 阿難漢位捨 次第一能變
是識名末那 依彼轉緣彼 思量爲性相
四煩惱常俱 謂我癡我見 并我慢我愛
及餘觸等俱 有覆無記攝 隨所生所繫
阿難漢滅定 出世道無有 次第二能變
差別有六種 了境爲性相 善不善俱非
此心所遍行 別境善煩惱 隨煩惱不定
皆三受相應 初遍行觸等 次別境謂欲
勝解念定慧 所緣事不同 善謂信慚愧
無貪等三根 勤安不放逸 行捨及不害
煩惱謂貪瞋 癡慢疑惡見 隨煩惱謂念
恨覆惱嫉慳 誑諂與害惱 無慚及無愧
掉舉與昏沈 不信并慚怠 放逸及失念

散亂不正知	不定謂悔眠	尋伺二各二
依止根本識	五識隨緣現	或俱或不俱
如濤波依水	意識常現起	除生無想天
及無心二定	睡眠與悶絕	是諸識轉變
分別所分別	由此彼皆無	故一切唯識
由一切種識	如是如是變	以展變力故
彼彼分別生	由諸業習氣	二取習氣俱
前異熟既盡	復生餘異熟	由彼彼遍計
遍計種種物	此遍計所執	自性無所有
依他起自性	分別緣所生	圓成實於彼
常遠離前性	故此與依他	非異非不異
如無常等性	非不見此彼	即依此三性
立彼三無性	故佛密意設	一切法無性
初即相無性	次無自然性	後由遠離前
所執我法性	此諸法勝義	亦即是真如
常如其性故	即唯識實性	乃至未起識
求住唯識性	於二取隨眠	猶未能伏滅
現前立少物	謂是唯識性	以有所得故
非實住唯識	若時於所緣	智都無所得
爾時住唯識	離二取相故	無得不思議

是出世間智 捨二鹿重故 便證得轉依
 此即無漏界 不思議善常 安樂解脫身
 大牟尼名法
 已依聖教及正理 分別唯識性相義
 所獲功德施羣生 願共速證無上覺

金二丁

※讀經に用いる『般若心經』および『唯識三十頌』は、四箇法要と同様、『法相宗三時課誦』所載のものである。

資料17・番ノ句

中宗傳燈之道

流布得レ時

高祖報恩之庭

林鐘迎レ節

方今

論場連レ袖

吹三七賢於竹林之風

學路鳴レ響

編ニ八俊於瑤池之波一

依之

大師聖靈

早開ニ智處城之曉、戸一

長吏諸徳

各期ニ龍花會之春庭一

※この時は、葉師寺で用いられている番ノ句が読誦された。

『番文集』（元禄十五年写、興福寺蔵）所載。

資料18・番論義（第一双―二）

便證得轉依論第十

問

當^レ處^ニ付^レ明^ニ說^ク教^ノ相^ニ且^ク本^ノ頌^ノ中^ニ便^ニ證^ス得^ク轉^レ依^ト云^ク々^ノ爾^者指^ス果^位轉^レ依^ト云^ク可^シヤ

シヤ

答

當處付明說教相且本頌中便證得轉依云々爾者指果位轉依云可シヤ

是ハ果位ノ轉依ヲ指スト云ヒ或ハ不爾ト云フ

二ノ意可^キレ有也

問

是ハ果位轉依ヲ指スト云ヒ或ハ不爾ト云フニ意可有也ト

答成ズル旨依^レ無^ニ一^ニ定^ニ旁^々ニ疑^有リ

若シ唯シ果位ノ轉依ナリト者^{イハバ}既^ニ說^ク修^習位^ニ頌^也定^テ可^レ有^シニ因^位轉^レ依^ニ耶

是以論中此中意說廣大轉依文 廣大

轉既ニ因位ノ轉依也 若シ果位ノ轉依ナリト

者^{イハバ}何^ゾ不^レ取^ニ圓^滿轉^ニ云^ク々^ノ爾^者餘^處ノ本^疏ニ至^テ無^學位

若シ依^レ之^ノ爾^者餘^處ノ本^疏ニ至^テ無^學位

便證轉依云々 旁々ニ有^リ疑^審定^ノ

分明ニ答申セ

答

答成ズル旨依^レ無^ニ一^ニ定^ニ旁^々ニ疑^ゴウタル様ハ若シ唯シ果位ノ轉依ナリトイハバ

既^ニ說^ク修^習位^ニ頌^也定^テ可^レ有^シニ

因位轉依ニ耶 是以論中 此中意說

廣大轉依文 廣大轉既ニ因位ノ轉

依也 若シ果位ノ轉依ナリトイハバ

何^ゾ不^レ取^ニ圓^滿轉^ニ云^ク々^ノ爾^者餘^處ノ本^疏ニ至^テ無^學位

若シ依^レ之^ノ爾^者餘^處ノ本^疏ニ至^テ無^學位

至無學位便證轉依云々

大旨ケ様ニ申スカ此事思イ難シト雖モ

シバラク一邊ノ難勢ニ任セテ便證得轉依

ト者唯佛果ノ轉依也 本疏ノ解釋上下

一同ナリ是以本頌ニ指ニ便證得轉依之

文ニ此即無漏界云々釋論ニ解レ之

此謂此前ニ轉依果即是究竟無漏

界攝云々任ニ本頌釋論ノ文ニ唯シ

說ニ佛果轉依ニナリ但シ至下明ニ修道ニ

頌ナリト云 難上者論ノ下ノ文ニ云此修

習位說能證得非已證得因位攝故云々

轉依ノ體ハコレ佛果ノ轉依ナリトイエドモ

修習ノ位ハ是レ能證得也故ニ依ニ

能證得ノ義ニ修道ノ中ニ指ニ之歟

全ウ無相違

資料19…番論義(第一双一)

龍猛皆空論第一

真宗総合研究所紀要 第八号

問當レ處ニ付レ明ニ說教ノ相ニ且龍猛提婆ノ

意依ニ勝義諦ニ可レ空ニ依圓ノ法躰ニ耶

答 當處付明說教相且龍猛提婆

意依勝義諦可空依圓法躰耶

是ハ云レ空 或云レ不レ然 可レ有ニ一ノ意ニ也

問 是云空或云不然可有二意ナリト

答成旨依レ無ニ一定ニ旁々ニ疑有リ 若云レ不レ

空者龍猛提婆ハ依ニ般若經ノ說ニ立ニ

萬法皆空ノ宗ニ既ニ執ニ皆空ノ文ニ爲ニ

實ノ道理ニ知又起ニ皆空ノ執ニ云事

若依レ之ニ爾 者今此ノ大論師ハ深位ノ

薩埵也何ゾ可レ起ニ皆空ノ執ニ耶

一旁々ニ有疑審定ノ分明ニ答申セ

答 答成旨依レ無ニ一定ニ旁々ニ疑ゴウ

タル様ハ若シ云レ不レ空者龍猛提

婆ハ依ニ般若經ノ說ニ立ニ萬法

皆空ノ宗ニ既ニ執ニ皆空ノ文ニ

爲ニ實ノ道理ニ知又起ニ皆空ノ執ニ云事

若依レ之爾ナリト者 今此ノ大論師ハ

深位ノ薩埵ナリ何ゾ起ニ皆空ノ

執一ベキヤ

大旨ケ様ニ申スカ此事雖難レ思任ニ

邊ノ難勢ニ不起ニ空執ニ可ニ成ジ申ナリ

但シ於ニ疑難一者爲レ破ニ小乘外道ノ實我

實法ノ執ニ依ニ般若經ニ立ニ皆空ノ宗

是唯任ニ如來ノ本意ニ遮ニ諸法實有

執一計也 全無相違

※一、二とも多川俊映師手沢本（昭和六十年写）

資料20：番論義（第二双）

許依五地 番論義重乃躰

問 當一處就レ明ニ開導一依相一且 超越不レ還 人依ニ未至一

地ニ可ニ得果一耶

今一度申セ

當一處付レ明ニ開導一依ノ相一且。耶ト云 麤一顯一問題デアル

今一度申セ

何一度云 聞 幾一度云 御已前重相過問一敷大一綱取レ牒

答一設

問一題 志趣甚一深一短才論一匠難レ生一領一解ニ爲ニ覺悟一今一

度申セ

問一題 麤顯髣髴殊 委細 爲ニ覺悟一申問云 聞 當處

何申當處

付レ明ニ開導一依相一

付レ明ニ開導一依相トハシ申敷

サゾカシ

元 當談一耶明一開導一依相明 事不レ珍 事デアル付レ之

何申

超越不レ還 人依ニ未至一地ニ可ニ得果一耶

依ニ未至一地ニ可ニ得果一耶 申敷

サゾカシ

元 依ニ未至一地ニ云事 不レ珍 事 如一何一様 心一得置事一
新 問題一構置 其志一趣詞一開申立付レ夫 取一答設

ケヤウズルデアル

殊 委細 ナケレ 凡聊 不審 依問一題 構一置ク處 委細 重

至難一勢一聞 問大綱取レ牒 答設

問一題 志一趣甚一深一覺一悟 重 ナケレ 凡委細 重 至一難一

勢一聞 申問大綱取レ牒 答設

當處 付レ明ニ開導一依相一且超越不レ還 人依ニ未至一地ニ可ニ得

果^ス耶^ハ是^ハ云^レ依^ニ未^ニ至^ニ或^ハ不^レ爾^ヲ云^ニ一^ノ意^キ可^レ有^ル也

是^ハ云^レ依^ニ未^ニ至^ニ或^ハ不^レ爾^ヲ云^ニ一^ノ意^キ可^レ有^ル也 答^フ成^ス旨^ニ一^ノ

定^ナ依^テ旁^ニ疑^ハ若^ク依^ニ未^ニ至^ニ者^ハ凡^ニ位^ニ已^ニ得^ニ上^ニ根^ニ本^ニ定^ヲ何^ノ

入^リ見^レ得^ル果^ト時^ニ可^レ依^テ下^ニ劣^ニ未^ニ至^ニ耶^ハ况^ニ有^ル論^ニ中^ニ明^ニ超^レ越^レ不^レ

還^ラ又^レ復^レ依^テ至^ル。乃^チ至^ル。得^ル不^レ還^ル果^ト。云^フツテ至^テ下^ニ二^ノ若^ク依^テ未^ニ至^ニ

。證^シ得^ル初^メ得^ル果^ト。云^フ々^ノ知^ル依^テ根^ニ本^ニ定^ニ云^フ事^ノ例^ニ如^ク下^ニ部^ニ

行^ク一^ノ等^ノ間^ニ不^レ依^テ未^ニ至^ニ入^リ見^レ道^ト也^ハ若^ク依^テ之^ニ爾^レシトイ^ハ者^ハ超^レ

越^レ不^レ還^ル。許^ス依^テ五^ノ地^ニ。取^リ釋^ス未^ニ至^ニ由^リ見^レヘタリ^ト旁^ニ有^ル疑^ト

審^シ定^シ分^シ明^シ答^フ申^スセ

今^ノ一^ノ度^ニ申^スセ 若^ク依^テ未^ニ至^ニ者^ハ凡^ニ位^ニ得^ル上^ニ根^ニ本^ニ定^ニ。許^ス依^テ五^ノ地^ニ。取^リ釋^ス依^テ

未^ニ至^ニ見^レヘタルヤト云^フ々^ノ麤^ク顯^ク難^ク勢^トデア^ル

今^ノ一^ノ度^ニ申^スセ

何^ノ度^ニ云^フ聞^クセウズルゾ幾^ク度^ニ云^フモ最^ニ前^ニノ重^ニ相^ニ過^ル問^ニ敷^ク大^ニ綱^ト

取^リ牒^ス答^フ設^ケ

答^フ難^ク勢^ト志^ト趣^ト甚^ク深^ク短^ク才^ト論^ニ匠^ノ了^ク解^ク難^ク生^ク爲^ス二^ノ覺^ト悟^ト今^ノ一^ノ

度^ニ申^スセ 難^ク勢^ト麤^ク顯^ク一^ノ往^ニ殊^ニ委^ニ細^ニ論^ニ匠^ノ覺^ク悟^ク爲^ス申^ス問^ニ云^フ一^ノ聞^ク

若^ク依^テ未^ニ至^ニ凡^ニ位^ニ既^ニ得^ル上^ニ根^ニ本^ニ定^ニ何^ノ入^リ見^レ得^ル果^ト時^ニ

可^レ依^テ下^ニ劣^ニ未^ニ至^ニ耶^ハ例^ニ如^ク下^ニ部^ニ行^ク等^ノ不^レ依^テ未^ニ至^ニ入^リ見^レ道^ト也

ガゾカシ

元^ノ二^ノ類^ニ中^ニ一^ノ邊^ニ趣^ク今^ノ難^ク勢^ト殊^ク相^ト違^フモ無^ク聞^クアル次^ニ

難^ク申^スセ

何^ノ申^スソ今^ノ難^ク勢^ト不^レ還^ル果^ト中^ニ。乃^チ至^ル。依^テ初^メ根^ニ本^ニ。諸^ノ師^ノ任^シ

解^シ釋^ス疑^ト論^ニ匠^ノ會^ク通^ク大^ニ釋^ス家^ノ所^ノ判^ニ背^ク舌^ノ形^ニ分^シ明^シ

立^ツヨ

答^フ元^ノ義^ト道^ト是^レ非^ク分^シ心^ニ得^ル置^ク時^ニ論^ニ匠^ノ才^ト覺^ク無^ク所^ノ背^ク次^ニ

難^ク申^スセ

イヤ其^ノ分^シ齋^ニ次^ニ難^ク難^ク移^ル依^テ下^ニ劣^ニ未^ニ至^ニ云^フ事^ノ解^ク釋^ス道^ト理^ト

有^ルレ之^ノ其^ノ分^シ齋^ニ分^シ明^シ二^ノ申^ス開^ケ

答^フ是^レ以^テ前^ニ難^ク流^ク類^ト最^ニ前^ニ分^シ齋^ニ二^ノハ過^ル次^ニ難^ク申^スセ

難^ク勢^ト開^ク論^ニ匠^ノ辨^ク置^ク見^ク次^ニ難^ク移^ル況^ニ論^ニ中^ニ明^シ超^レ

越^レ不^レ還^ル又^レ復^レ依^テ止^ル。乃^チ至^ル。得^ル不^レ還^ル果^ト。云^フ

答^フ得^ル不^レ還^ル果^ト。云^フトハシ申^ス敷

ガゾカシ

答^フ論^ニ家^ノ所^ノ判^ニ返^シ相^シ分^シ事^ト一^ノ邊^ニ付^ク難^ク勢^ト痛^クナ^ラヌデア^ル

次^ニ難^ク申^スセ

元^ノ意^ト言^フ四^ノ根^ノ難^ク指^ク事^ト不^レ依^テ未^ニ至^ニ云^フ事^ノ分^シ明^シ樣^トナ^イ

答難勢由有ゲニ申七共通途一徃分齋別所答談
及次難申七

イヤ其分次難難移下至若依未至定。證得初果。云依
未至類別初果ヲ舉事超越人依根本一定云道理
必然樣覺能ク文相幽致ヲ置所答設ケ

答是最前難流類以前分齋過アル次難申七
難勢聞論匠覺悟見次難移アル例如下部行等

不依未至二人見道上也
答如レ入二見道一也申歎

サソカシ

答例難一准無レ之事強痛ナラスデアアル次難申七
イヤ其分齋次難難移超越類得根本定何依未
至得果事ハ有爰程例難申開ケ

答例難有レ之事幾無相違次難申七
何申最前難流類如何様心得置申ゾ今此難勢

源如來金言何得疑フ事胸難任分齋難依用能得
心置所答設ケ

答難勢未開次難申七
論匠數日讚仰經一向取不レ入見一口取答及

幾度難勢舉其詮大綱一邊難勢福若依之サ

ゾトハシ申サハ

答若依之サゾトハシ申サバ

超越不還。許依五地。釋依未至一見

答由未至一見申歎

サソカシ

答是論匠終得分所答設不レ及次難申七
終德分如何様心得置申其德分形申立ヨ

答一義中一義取終難分關次難申七
論匠終德分申上重疑舉及難勢大綱此分

地。所釋依未至一見大旨加様申カ
答成旨一定無依旁疑様若依未至一者。許依五

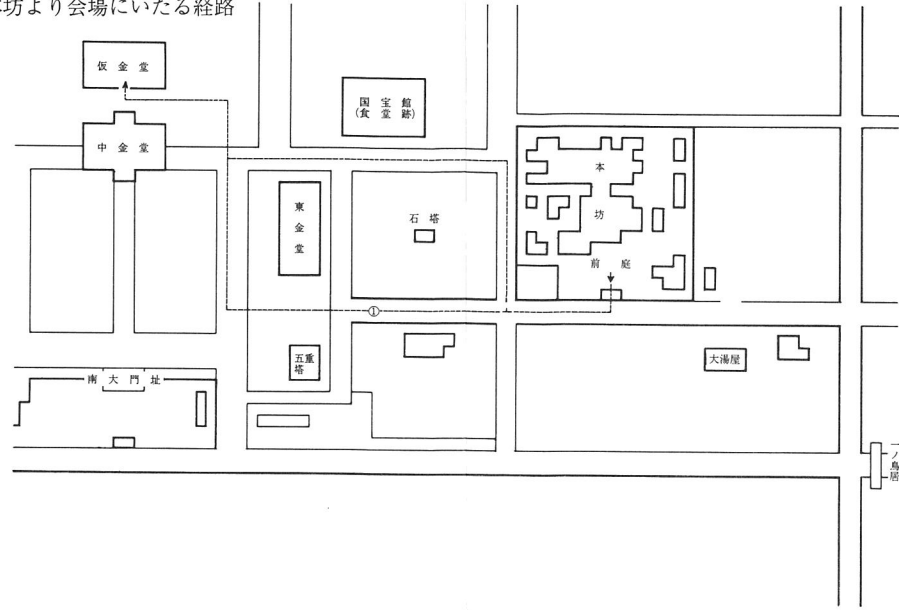
類上也但於疑難一者超越人中付三利根様淡也全無相
違一

大正十五丙寅歲晚秋 謹寫

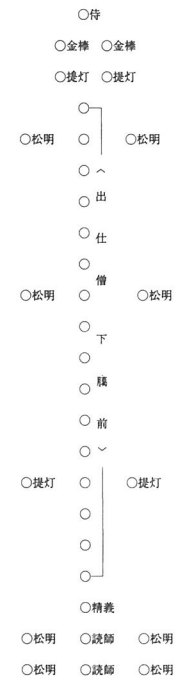
南京北寺乘俊

※多川乘俊師手沢本（大正十五年写）

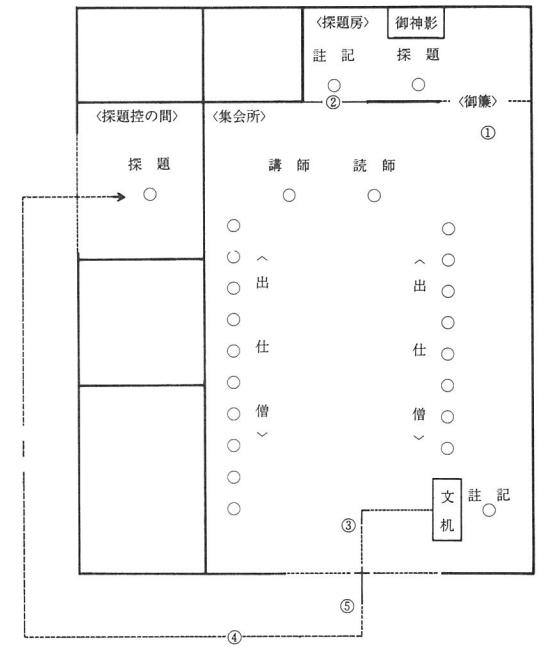
図Ⅲ 本坊より会場にいたる経路



図Ⅱ (本坊より道場にいたる列)



図Ⅰ (夢見の事・請定奉唱の事)



図Ⅴ (探題入道場の列)



図Ⅳ (会場 [仮金堂] 内見取り図)

